

日本英語教育史学会 会報

266

2014 年 12 月 20 日

HiSET *Society for Historical Studies of English Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 **日本英語教育史学会**

学会ウェブサイト <http://hiset.jp/>

日本英語教育史学会 (代表 江利川 春雄)

【事務局】和誠堂文庫

〒121-0011

東京都足立区中央本町 5-10-22

e-mail: membership@hiset.jp

口座 (名義) 日本英語教育史学会

ゆうちょ銀行: 00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行 千住中央支店

(普通) 0997182

第250回研究例会報告

2014 (平成 26) 年 11 月 16 日 (日), 拓殖大学文京キャンパス国際教育会館 (東京都文京区大塚) において, 第 250 回研究例会が開催されました。研究発表は, 「東京高等師範学校文科兼修体操専修科のこと」 (竹中龍範・香川大学) 及び「資料紹介 修猷館高校所蔵の戦前期英語教科書選定資料について」 (安部規子・久留米工業高等専門学校) の 2 本が行われました。司会は佐藤恵一氏 (工学院大学 [非常勤]) でした (出席者 27 名)。以下に出席者の感想を掲載します。ご参照ください。



◆竹中先生の御発表「東京高等師範学校文科兼修体操専修科」のことは, とても興味深く勉強になりました。体育科のカリキュラムの英語の授業時数が想像以上に多いことには当時の日本国家の有為の人材に対する期待を感じました。門外漢の自分ですが, また勉強させてもらえれば幸いです。どうもありがとうございました。 (木村一弘)

◆今回は, ご発表の中で, 貴重な資料の原本も拝見させていただきありがとうございました。当初は体操と英語にどのような関係性があるのかと思いましたが, すごく興味深い内容でした。また, 教科書選定につきましては, 全く聞いたことのない発表でしたので新鮮で印象的でした。本日はありがとうございました。

(丹羽理紗)

◆本日は日本英語教育史学会に参加させていただき, ありがとうございます。この学会には数回参加させていただきましたが, 毎回貴重なお話を聞くことができ光栄に思っています。本日も様々な資料を見せていただき, その頃の英語教育があつての今だと実感いたしました。 (高野詩織)

◆貴重なお話ありがとうございました。当時の資料にも直接ふれることができ, とても良い経験となりました。現在の英語教育の欠点であるスキルだけを重視し人格形成がおろそかになっている点については, 当時は人格形成に一層着目されていたことを知り, 今と昔では教育に違いがあったことを知りました。又, 当時はイギリス系英語が大半であり, 発音が重視されていたことも知りました。 (野村壮太)

発表を終えて

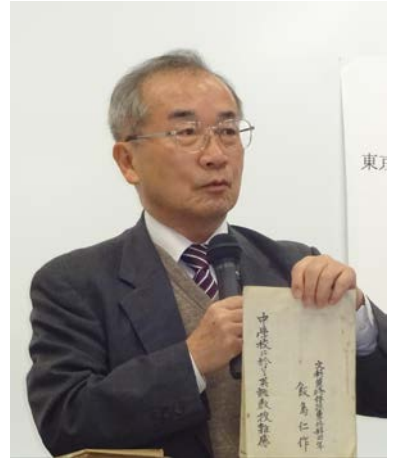
竹中 龍範 (香川大学)

まず、第 250 回という記念すべき節目の研究例会にて発表の機会を与えていただいたことに御礼を申し上げます。

本発表の際に「文科兼修体操専修科四年／飯島仁作／中學校に於ける英語教授雑感」という筆書き文書を翻字し、これを附録資料として添えましたが、この資料を入手したのは 30 年近く前になります。ただ、その時には英語教育に係るものであることは認識しつつも、文科兼修体操専修科なるものについての情報が得られず、これが東京高等師範学校に置かれた課程であることの調査、飯島仁作なる人物についての情報収集をのんびりとして行っておりましたが、これでは埒が明かないと思い、この数年、気を入れて調査を進めました。

今回はその結果をまとめて発表することができましたが、本課程卒業生について、体操教師と英語教師の何れであったのか不明の人物も少なからずという結果となりました。手掛かりが乏しいという事情もありますが、それでも英語教員養成史の一隅に光を当てることはできたかと思っております。

会員の皆さまから一片でも二片でも情報提供をいただいて、少しでも不明箇所を穴埋めできればと願っておりますので、よろしく願いいたします。



◆①まず、明治末年に手書きで提出された報告書「中學校に於ける英語教授雑感」の現物の存在に驚きました。学生によるかなり高度な授業批評が行われており、東京高師の教員養成がいかにハイレベルであったかを思わせます。体操専修科ながら、何人もの卒業生が英語教師となったことも納得できます。彼らの足跡を丹念に追う調査方法にも感銘を覚えました。ありがとうございました。(Horse)

◆①体操専修科のカリキュラムまた、その後の活動について研究なされたということで体操専修といいながらも本科とほぼ同じ時間を英語学習に費やしていたこと、また卒業後体操教員のみならず英語教員になった方も少なくはないと発表で聞き大変興味深く思い、またそんなハードスケジュールをこなして体操教員と英語教員のふたつの道を開いた彼らを尊敬しました。私は現在英語を専

門として学んでいますが英語を勉強することだけで精一杯です。くじけそうになった時は“そんな人”もいたことを思い出して私ももっと頑張りたいです。

(沼田ひかる)

◆①体操専修科でなぜ英語を含む「文科兼修」が行われたのか。その謎を一次資料に基づいて解き明かす刮目すべきご発表でした。兼修の背景には、明治 30 年代における「教育学」をめぐる認識の変化が影響していると思いました。つまり、中等以上の教育においては、体育のスキルを教えるのみではなく「人格養成」に寄与しなければならないとする考え方です。それは岡倉由三郎が「英語教授」ではなく「英語教育」（英語を通じての人格養成）を打ち出したことに通底すると思いました。いま平成の英語教育はスキル一辺倒。これではいけない、と思いました。

(みかん舟)

◆①竹中先生のご発表は資料の収集だけでなく登場する人物は卒業後どうなったかまで一人一人問い合わせられた時間を気にかけず資料の後追いを計られたことは見習いたい。ご発表によって同じ高師でも体育学系と英語学系と比較的密接な関係があったことを教えられた。その伝統があったせいか現在でも当時の校長であった加納治五郎先生は多くの先生方の寄付金によって銅像が大塚だけでなく筑波の地にも建てられて伝統が維持されている。

(Taxi Smoker)

◆①東京高師の文科兼修体操専修科について初めて知りました。資料・史料にいかに斬り込むかのお手本を示していただいた思いがします。地道で手堅い手法から少しずつ明らかになってくる事実。すっかり聴き入ってしまいました。質疑応答でも取り上げられましたが、英語を教えることと人格を養成することとの関連についても考えさせられました。

(KZ)

◆①今回、東京高等師範学校の文科兼修体操専修科という科が設置されていた時期があること、及び体操専修科の英語の実力の一端を教えてくださいました事に感謝申し上げます。

東京高師の専修科なので社会を経験し再び学生となられた方もいたと思いますが、将来を体育でという方ばかりではなく英語で教員となられた卒業生がいたことも更に感銘を受けました。貴重な発表に感謝申し上げます。ありがとうございました。

(K.S.)

◆英語科で行う授業と同じものを体育科の学生が受け、中には英語科の道へ進む者もいたというお話に大変驚きました。現在、英語科の学生ですらまともな英語が使えないのに、体育を専門としつつ英語科顔負けの内容とは、現在の学生がいかに学業に対しての取り組みが甘いのかと考えさせられます。また英語の教師に必要なものこの体育専

門でかつ英語を学んだ方々によって学べて、とても勉強になりました。教職を目指す者として、また一層勉強に励もうと思います。

(匿名希望)

◆久しぶりに例会に出席しまして、とても良い刺激をいただきました。ありがとうございます。

コメント(感想)ではないのですが、私信です…来春より北海道に転居予定です。教育史に関する研究会などで参加できそうな会がそちらにもあれば…とは思っております。お心あたりがございましたら、伺いたく存じます。が、サッポロ-東京のアクセスも良いようなのでこまめにこちらに出席させていただければと考えております。

(N.T.)

◆明治期から、体育と英語が密接に関わっていたという事実はとても驚きました。現代の英文化に所属している学生よりも当時の体育科に所属しながら英語を学んでいた学生のレベルの方が高いのではないかなという印象を受けました。教科書検定においては、大正時代から様々な要素が考慮されていて時代が変わるにつれ、改訂理由も異なっておりおもしろいなと思いました。

(平敷成美)

◆②修猷館の教科書の変遷について、大変な労力を費やされたのではと思います。貴重な発表をありがとうございました。

今後、これをどう活かし英語教育としてまとめるかは、フロアの先生方から良い意見が出ていたように思います。先生の更なる研究に期待しております。

(K.S)

◆②採用科書の選択のリストが大正期から出来上がったのは発表者のご労力に感謝したい。しかし、教科書名が当時のかたかなで書かれておりイングリッシュをイングリッと書いてあったりリーダー、リィダなどまちまちである。統一性が望ましいと思う。

(Taxi Smoker)

発表を終えて

安部 規子 (久留米工業高等専門学校)

今回は「資料紹介」として、修猷館高校所蔵の大正時代の「普通会議録」に記された教科書の変更申請の記録に焦点を当てました。その内容から、定番の英語教科書を毎年使用していた明治時代とは異なり、生徒の上級学校受験のための英語学力向上を目指して、新しく出版される教科書やサイドリーダーを次々と採用していった大正時代の中学修猷館の状況が明らかになりました。これは地方都市の旧制中学に共通した状況であったかも知れません。教材の選択については、フロアの先生方から、教科書採用に関与した英語教師の学歴等、異なる分析の視点をご教示いただきました。それらを参考に今後さらに調査していきたいと思っております。ありがとうございました。



◆②戦前の英語教科書は、どのように採択・変更されていたのか。この長らく謎だった問題を、現物資料に基づいて解明しつつあるご研究に感動しました。教科書採択の理由には公文書に書ける部分（内容、体裁、虎の巻の有無など）と、書けない部分（学閥、営業力、教師用指導書の魅力など）があると思っておりますので、その点を明示された上で、ぜひ論文化なさってください。英語教科書史の知られざる一面が解明されると思っております。なお、こうした教科書採択をめぐる議論を中学校教員から奪ってしまう現在の「広域採択制」は、廃止すべきだと再認識しました。戦前の方が自由だったなんて、現状がおかしいです。(みかん舟)

◆②修猷館における採択教科書変更をその理由とともに明らかにしていただきましたが、特に最後の一覧表が分かりやすい形で示されており、興味深くご発表をうかがいました。この記録文書の整理をお進めいただきとともに、質疑の中でも指摘があったように、その背後にひそむ要因を解明しながら、教科書自体の質的・量的分析とは異なる角度からの教材史研究をまとめていただければと期待しております。(Dragon)

◆②大正期の修猷館で採用された英語教科書の変遷、およびその選定理由を記した資料の紹介を大変興味深くうかがいました。記述された理由がすべてではないにせよ、各教科書に向けられた当時の評価の一端を知ることのできる貴重な資料だと思います。さらに資料分析を続けてくださることを期待しています。(Horse)

◆②たいへん貴重な資料をご紹介いただきました。教員を取り巻く事情は今も昔も変わらないものだと感じました。質疑の時間に示された数々の意見にはおおいに共感しました。(KZ)

◆②「生徒には難しすぎる」「文法問題が多すぎる」などの生徒のことを一番に考え教科書えらびに苦悩する教員の姿が目にかびました。新しい教科書がでたり教員がよりよい教科書を見つけて採用することで、現在に至るまで英語教育はどんどん改善されてきたことがわかりました。当時の教育の方のそういった努力や、今も同じように私たちに合った教科書を選んでくれている先生方に感謝して、自分自身も未来の英語学習者のために何かできたらいいなと思いました。(沼田ひかる)

≫ 今後の研究例会の開催予定

- ◆ 第 251 回 2015 年 1 月 11 日 (日) 開催地: 東京都 (※詳細は本会報最終ページ)
- ◆ 第 252 回 2015 年 3 月 15 日 (日) 開催地: 大阪市

発表を希望する会員は (1) 発表希望月, (2) タイトル, (3) 発表概要 (100~200 字程度), (4) 使用予定機器, 以上 4 点を明記の上, 発表希望月の前々月 10 日 (3 月発表希望であれば 1 月 10 日) までに, 日本英語教育史学会例会担当 (保坂芳男) までお申し込みください。

Email: yhosaka@ner.takushoku-u.ac.jp

TEL&FAX: 042-665-3225 (拓殖大学・保坂研究室)

≫ 英語教育史フォルダ

- ◆ 広川由子 (名古屋大学大学院生) 「占領期日本における英語教育構想: 新制中学校の外国語科の成立過程を中心に」 日本教育学会『教育学研究』第 81 巻 3 号 297-309 頁

≫ 事務局より

学会誌『日本英語教育史研究』のバックナンバーを無料で差し上げます

学会創立 30 周年を記念し, 学会誌『日本英語教育史研究』のバックナンバーのうち, すでに J-STAGE 上で電子化されている号を会員のみなさまに無料で差し上げます。今回, その対象となるのは以下の各号です。ただし, 創刊号は覆刻版となります。

創刊号 (1986)・第 2 号 (1987)・第 3 号 (1988)・第 4 号 (1989)・第 11 号 (1996)・第 12 号 (1987)・第 15 号 (2000)・第 16 号 (2001)・第 17 号 (2002)・第 18 号 (2003)・第 19 号 (2004)・第 20 号 (2005)・第 21 号 (2006)・第 22 号 (2007)・第 23 号 (2008)

- (1) ご希望の方は 1 月例会にお越しください。その場で差し上げます。
- (2) 例会にお越しになれない方には「宅配便」の「着払い」でお送りします。お名前・送付先・希望の号を葉書または電子メールで以下までお知らせください。2015 年 1 月 9 日(土)必着とさせていただきます。葉書の場合, 宛先が事務局と異なりますのでご注意ください。

→ ハガキ: 〒212-0054 神奈川県川崎市幸区小倉 1-6-10-305 河村和也

メール: membership@hiset.jp

- (3) 在庫には限りがありますので, ご希望に添えないこともありますことをご承知おきください。

EDITOR'S BOX 年の瀬も押し迫ってまいりました。どうか皆様, よいお年をお迎えください。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室)

第 251 回 研究例会（学会創立 30 周年記念例会）のご案内

日 時： 2015 年 1 月 11 日（日）午後 2 時～
 会 場： 拓殖大学 国際教育会館（F 館）（東京都文京区大塚 1-7-1）
 3 階 301 号室

シンポジウム： 日本英語教育史学会 30 周年記念「回顧と今後への期待」
 内 容： パネラーに茂住實男氏（元事務局長），小篠敏明氏（元会長），島岡丘氏（評議員）をお招きし，竹中龍範氏（前会長）の司会進行の下に，学会 30 年の歴史，エピソードを縦横に語ってまいります。それを踏まえて，会場のみなさんと一緒に今後の学会のあり方を模索できたらと考えています。当日は，会員から提供された学会のお宝資料も展示します。

参 加 費： 無料

問い合わせ先： 保坂 芳男（メール: yhosaka@ner.takushoku-u.ac.jp TEL/FAX: 042-665-3225）

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

【会場案内】（拓殖大学ウェブサイトより）



会場：拓殖大学 国際教育会館〔F 館〕（東京都文京区大塚 1-7-1）

【交通案内】

東京メトロ丸ノ内線

茗荷谷駅下車 徒歩 5 分

都営バス【都 02】系統

茗荷谷駅前（拓殖大学前）下車 徒歩 5 分